



# 追悼 ゴルバチョフ元ソ連共産党書記長 ソ連解体をめぐる揺れる 内外の評価

Mikhail Sergeevich Gorbachev

(1931年3月2日～2022年8月30日)

スタヴロポリ地方生まれ。1985年に54歳の若さでソ連共産党書記長就任。ペレストロイカと称される改革を進めてソ連再建を図った。89年ブッシュ米大統領とマルタ島で会談し冷戦終結を宣言。90年ソ連大統領。同年ノーベル平和賞受賞。91年ソ連は崩壊し、大統領を辞任。その後は独自の政治活動を続けた。

1988年12月、訪米したゴルバチョフ書記長(右)とレーガン大統領(中央)、ブッシュ次期大統領。米ニューヨーク港を見下ろす展望台で (AP / アフロ)

法政大学教授

## 溝口修平

みぞぐち しゅうへい 二〇一一年東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期退学。博士(学術)。中京大学准教授などを経て一九九年より現職。専門は比較政治学、現代ロシア政治外交。著書に『ロシア連邦憲法体制の成立』など。

八月三〇日にミハイル・ゴルバチョフが死去した。九一歳だった。最後のソ連共産党書記長で、唯一のソ連大統領であるゴルバチョフは、冷戦終結をもたらした指導者として国際的には高く評価されているが、ロシア国内ではその

評価は非常に低い。それでは、ゴルバチョフとはどのような人物で、彼が行った改革はどのようなものであったか。そして、彼が遺したものは、現在のロシアや国際社会にとってどのような意味を持つのだろうか。

## 共産党エリートとしてのゴルバチョフ

一九三一年にロシア南部のスタヴロポリ地方で生まれたゴルバチョフは、モスクワ大学法学部を卒業後、故郷の共産党青年組織コムソモールでキャリアをスタートさせた。その後、スタヴロポリ地方の共産党第一書記を八年務め、七八年に農業担当の中央委員会書記として再びモスクワにやって来た。この時ゴルバチョフは四七歳であり、高齢化した中央委員会の中で最年少であった。

共産党組織の中で頭角を現したゴルバチョフは、八五年三月に五三歳でソ連共産党書記長に就任した。一九六四年から一八年間にわたり最高指導者であったブレジネフが八二年に亡くなり、その後を継いだアンドロポフ、チェルネンコも一年ほどで相次いで亡くなった。指導部の高齢化が問題となる中で、前任者から二〇歳も若いゴルバチョフが共産党書記長に就任したことは、大きな変化を予感させるものであった。ゴルバチョフ自身も、ブレジネフ時代を「停滞」の時代とみなして人事を刷新し、指導部の世代交代を進めた。二八年間外相を務めたグラコムイコに代わり、それまで外交経験のなかったグルジア共産党第一書記のシエワルナゼを任命したことは、象徴的であった。

## ペレストロイカが生み出した巨大な変化

ゴルバチョフが共産党書記長に就任したとき、ソ連は依然として強大な軍事力を持っていたが、経済的には資本主義世界から大きく立ち遅れていた。原油価格の下落や泥沼化したアフガニスタン戦争は、ソ連経済にさらなる打撃を与えていた。このような状況に危機感を募らせていたゴルバチョフは、グラスノスチ（公開性、言論の自由）やペレストロイカ（再建）と呼ばれる改革を実施した。

ペレストロイカによってゴルバチョフが目指したものは、停滞した経済を回復させ、ソ連を文字通り「再建」することであった。つまり、ペレストロイカは、ソ連の最高権力者であるゴルバチョフが主導した「上からの改革」であり、それはあくまで体制内改革であった。しかし、最終的には東欧諸国も含めた社会主義体制の崩壊、冷戦の終結、ソ連国家の解体を招き、二〇世紀の歴史における大きな転換点となった。ペレストロイカは、彼の意図を越えたより大きな変化を国内外にもたらしたのである。

ゴルバチョフは、党書記長就任直後から大胆な改革に着手したわけではなかったが、一九八六年末ごろから外資の導入、企業経営の自立化などを目的とした本格的な経済改

革を実施した。しかし、そうした経済改革は省庁や党の官僚層からの抵抗にあり、思うような成果を上げられなかった。そこで七八年ごろから政治機構の改革を実施し、競争選挙や政治的多元主義の導入をはじめとして、政治システムを抜本的に変革した。これは、共産党が労働者の利益を代表する唯一の組織であり、共産党が政治的決定だけでなく経済活動も全てをコントロールするというソ連の基本原則からすると、大きな変革であった。

ただし、こうした政治改革も、ゴルバチョフの考えではあくまで体制内改革であった。ゴルバチョフの狙いは、停滞したソ連を再生させることにあり、そのためには情報公開を進め、肥大化した共産党機構をスリム化することが必要であった。しかし、そのことは二つの意味でゴルバチョフを政治的に不安定にし、最終的にはソ連を解体させることになった。

一つは、政治改革がゴルバチョフ自身の権力基盤を掘り崩したということである。ソ連共産党書記長であったゴルバチョフは、共産党を中心とした集権的システムの頂点に立つ存在であり、共産党の権力を弱める改革は自身の権力基盤を失わせるものであった。ゴルバチョフは九〇年に大統領制を導入し、権力の中心を共産党政治局から大統領府

へと移行しようとしたが、それは円滑には進まなかった。

もう一つには、政治的な多元化が進んだことで、ゴルバチョフ自身への批判がさまざまな方面から噴出したということである。特に、政治改革の一環として人民代議員大会という議会が設置され、各共和国でも大きな権限を持った議会制度が整備されると、共和国の代表はゴルバチョフの改革にさまざまな要求を突きつけた。九〇年になると、バルト諸国では独立宣言が採択され、ほかの共和国でも権限拡大を求めて主権宣言が次々と採択された。その結果、ゴルバチョフは政治的に孤立していった。

ゴルバチョフはソ連を従来よりも分権的な連邦制につくり変えることで、急進化した分離主義を抑え込もうとしたが、各共和国の民族主義者には「中途半端な」改革だと批判された。また、民族対立や独立運動が激化したアゼルバイジャンやリトアニアなどの共和国に軍事介入したことは、独立運動をより勢いづかせることになった。さらにこれらの事件は、彼を支えてきた改革派の知識人たちが彼らから離反するきっかけにもなった。一方、ペレストロイカがソ連を大きく変革していることに不満を募らせていた保守派には、連邦を維持するためのゴルバチョフの対応は手ぬるいものに見えた。このようにして、ゴルバチョフは、急

進的改革派・民族主義者と保守派・連邦維持派の双方の批判に晒されることになった。また、初期には高かった一般国民からの支持も九〇年には急速に低下していった。

以上のように、「上から」始まった改革は、「下から」の突き上げによって、ついにはゴルバチョフ自身が制御できないものとなっていった。ゴルバチョフは最後まで連邦維持のために共和国と交渉が続けたが、九一年八月にソ連政府保守派がクリミアで休暇中のゴルバチョフを軟禁し、大統領辞任を迫るという事件が起こった。クーデターは結局失敗に終わったが、この事件によってゴルバチョフの権威は大きく失墜した。また、ロシア共和国大統領としてゴルバチョフと政局の主導権を争っていたエリツィンが、クーデターをいち早く非難したことで大衆的人気を集めて、以後のソ連解体の動きを主導した。こうして、九一年一二月にロシア、ウクライナ、ベラルーシの三カ国が独立国家共同体（CIS）の創設を宣言し、その後ゴルバチョフがソ連大統領の辞任を発表したことで、ソ連という国家は消滅することになった。

## 新思考外交 冷戦終結へのリーダーシップ

ゴルバチョフにとって、国内での改革と同程度に、西側

との緊張緩和も重要な課題だった。ソ連経済を再生するためには、軍需偏重の産業構造を転換し、国防支出を削減する必要があったからである。そこでゴルバチョフは、前述のシェワルナゼにとどまらず、外交政策担当の補佐官にも個人的に近い人物を登用して人事を刷新し、「新思考」と呼ばれる新たな外交政策を展開した。そして何より、自らが先頭に立って、米国をはじめとする西側首脳と積極的に交渉を行ったのである。

そうした首脳外交の成果が最も顕著に現れたのが核軍縮の分野だった。一九七九年のソ連によるアフガンスタン侵入以来、米国のカーター、レーガン両政権はソ連に対して強硬な政策をとり、「新冷戦」と呼ばれる状況が続いていた。しかし、ゴルバチョフの登場後レーガンは対話の姿勢に転じ、八五年一月に六年ぶりの米ソ首脳会談がジュネーブで行われた。その後両者は首脳会談を重ね、八七年一二月には中距離核戦力全廃条約（INF条約）を締結した。これによって、欧州に配備されていたソ連のSS-20や米国のパーシングIIなど、多くのミサイルが解体されることになった。米ソ間の信頼関係を構築し、国際的な緊張を緩和させたことは、ゴルバチョフの最大の外交的成果と言えるだろう。

もう一つの大きな功績は、いわゆる「ブレジネフ・ドクトリン」の放棄である。それまでソ連は、ハンガリーやチェコスロバキアで起きた改革運動を軍事介入によって鎮圧し、そのことが東欧諸国における改革運動を抑制していた。このように、東欧諸国の主権や独立はワルシャワ条約機構全体の利益に従属するとされ、それは「ブレジネフ・ドクトリン」と呼ばれていた。それに対し、ゴルバチョフは、自らが実施するペレストロイカにならない、東欧諸国でも改革が行われることを望んだ。そして、各国がどのような道を進むかはそれぞれの国に「選択の自由」があるとして、東欧諸国が共産党の支配する体制から転換するとしても、それを容認する姿勢をみせた。特に、八八年二月の国連演説で「ブレジネフ・ドクトリン」を放棄することを宣言し、ソ連軍兵士の五〇万人削減と東欧諸国に駐留するソ連軍部隊撤退の構想を発表したことは、世界中に大きなインパクトを与えた。このように、ソ連による軍事介入の恐れがなくなったことが、東欧諸国で八九年に立て続けに革命が起こり、社会主義体制が崩壊することを可能にした。

米ソの核軍縮の進展と東欧諸国での革命は、冷戦が終結する上での大きな前提条件となった。ベルリンの壁が崩壊してから約一カ月後の八九年二月、ゴルバチョフはレー

ガン政権を引き継いだブッシュ大統領とマルタ島で会談し、両者は米ソ関係が新時代に入ったと宣言した。このように、冷戦の終結にとってゴルバチョフのリーダーシップは極めて重要な役割を果たした。

## ゴルバチョフが遺したもの

これまで見てきたように、ゴルバチョフというリーダーの存在は、ソ連国内だけでなく国際社会全体にも大きなインパクトを与えた。その意味で、彼が二〇世紀を代表する政治指導者であったことは間違いないだろう。しかし、一九九〇年にノーベル平和賞を受賞するなど国際的には彼の功績は高く評価されているのに対し、ロシア国内での評価は高くない。二〇二一年の世論調査では、ゴルバチョフはロシアに対しどのような功績を残したかという質問に対し、グラスノスチが九%、ペレストロイカが四%、国際関係の発展が三%で、何も良いことはしていないと答えた人が三七%だった。また、ゴルバチョフの行動がロシアに利益と損害のどちらを多くもたらしたかという質問に対して、損害と答えた人が五一%、利益と損害が同等と答えた人が三二%で、利益と答えた人はわずか七%だった。

ロシア国内での評価が低い理由として、多くの人がソ連

解体の責任はゴルバチョフにあると考えていることが挙げられる。特に、ソ連解体後の市場経済化がロシア経済に大きな打撃を与えたことは、ロシアの人々にとってトラウマのようになっている。実際には、市場経済化が本格化したのはゴルバチョフ退任後のエリツィン政権においてであるが、ゴルバチョフが自身を正当化するためにブレジネフ期を「停滞の時代」と揶揄したように、エリツィンもソ連解体とその後の混乱の責任をゴルバチョフに押しつけた。

ただし、現在わずかながらではあるがゴルバチョフの評価に変化も生じている。前述の通り、ゴルバチョフの功績としてグラスノスチを挙げた人は、二〇二二年に九%であったが、一六年にはそれはわずか三%であり、五年間でその割合は六ポイント上昇した。何も良いことはしていないと答えた人の割合も、この五年間で一〇ポイント減少している。プーチン政権下で近年、言論統制や自由に対する制限が強まっていることが、ゴルバチョフによる情報公開や言論の自由の進展に対する再評価を促している。ロシアのウクライナ侵攻によって国内の締めつけはますます厳しくなっているため、こうした再評価の動きは今後さらに強まるかもしれない。

他方、ゴルバチョフの外交上の功績に対しては、依然と

してロシア国内での評価は低い。冷戦終結によって東西の分断を克服し、米ソが協力して欧州の安全保障や国際秩序の維持に貢献する——ゴルバチョフが掲げた「欧州共通の家」や「全人类的価値」といった概念にはそうした期待が込められていた。しかし実際には、冷戦後の国際秩序の形成は「西側の勝利」という前提のもとで進められた。冷戦終結がもたらしたのは、ロシアの国際的地位の低下であり、ロシアは自身が期待したような役割を国際社会の中で担うことはできなかった。ゴルバチョフの評価が国内外で大きく異なるのは、そうした事情を反映している。

その意味で、ロシアが繰り返し非難する北大西洋条約機構（NATO）の東方拡大は、ロシアの視点からは世界の分断を助長するものに見えており、冷戦後の国際秩序に対するロシアの不満を象徴するものであった。ゴルバチョフ自身も、著書『変わりゆく世界の中で』において、東西ドイツ統一交渉の中で中東欧諸国に対するNATO不拡大の約束はなかったと述べているが、それでもその後東方拡大が進んだことには批判的であった。冷戦終結によって克服されたかに見えた東西の分断は、欧米諸国とロシアのすれ違いを生み出し、その傷は冷戦終結から三〇年以上経過した現在、むしろ広がってさえいる。●